

# 毎日が海外生活

今村彩子 (特殊教育・3年)

騒がしい教室。先生が来て講義が始まるつかの間のお喋りを楽しむ学生。普通ならここで、「彼らの話し声や笑い声が飛び交っている」という表現がくるだろうが、私の補聴器に入ってくるのは、ラジオのザーザーという音に似た騒音だけ。先生が現れるとザーザーの音は潮を引くように小さくなり、静かになる。先生が出席をとり始めたようだ。しかし、私には「音」としか聞こえない。これが私の講義のスタートだ。

両耳に補聴器を着用しているが、私の聴力では「音」の存在は分かっても強弱と高低の違いしか区別ができず、言葉としての意味をなさない。また、補聴器には弁別能力がないので、椅子を引く音、かばんを置く音、机をどかす音などが話し声や笑い声と一緒に補聴器に飛び込んでくるのだ。皆さんは「聴読話」という言葉をご存知だろうか？補聴器からの音と人の口の動きで、話を理解することである。しかし、早口や口の動きが小さかったり、口が見えなかったらお手上げだ。聴読話には推測する鋭い勘と集中力が必要だ。補聴器は残存聴力を補い、聴読話を助ける。時々、補聴器に口を近づけて話す人がいるが、これは問題外だ。音が大きくなるだけで口が見えず、読話ができないからだ。口が見えるように向き合い、口の動きにメリハリをつけて話してもらおうと理解しやすい。英会話を始めたばかりの人に外国人教師が、メリハリをつけて話してくれるのと同じように。

補聴器と聴読話のことが大体分かってもらえたところで想像してみたい、海外旅行へ行った時のことを。街中は外国語が飛び交い、にぎやかだ。隣の陽気なオジさんが早口で何か話しかけてくる。しかし、当然、自分の母国語ではないので分からない。私はひとときの旅行でなく、日本に

いてもずっとこのような状況に置かれている。

ふーん、こいつは毎日海外で生活しているようなものかと、少しは私の置かれている状況が理解頂けたと思う。では、私はどのように講義を理解しているのかと皆さんは疑問に思われるだろう。講義中、先生が長々と話している声が聞こえるだけで、内容は分からない。そこで心強い味方、ノートテイカーが登場する。先生の話聞いてノートに書く人のことだ。私は、同じ講義をとっている友達にノートテイクをお願いしている。両側に友達が2人座り、先生の話や学生の発言などを交互にノートに書いてもらうのだ。話す速さは書く速さより速いので、全ては書ききれず、所々要約して書いてもらっている。このノートが私の講義の全てなのだ。だから、講義と私のパイプ役という大切な役割をしている友達にはいつも感謝している。しかし、ノートテイクには限界がある。書かれた内容を読んで質問や発言をしようと思っても、次の所に進んでしまいタイミングがつかめなまま終わることもある。また、先生がジョークを飛ばし、教室が笑い声で包まれてもその時は、なぜ笑っているのか分からず、講義に参加しきれないと感じる。それで、最近手話通訳があったらいいなという気持ちが強い。

そんな私の願いが現実となり、先月から専攻している英語の講義に手話通訳者がついた。先生の話がすぐ分かり、初めてその講義に夢中になった。外国語の講義で日本語が飛び出し、あっ、これ分かる！と親しみを覚える状況と似ている。

愛教大にとって手話通訳による講義保障は初めての試みで検討すべきことは多いが、正式な制度として発足してもらいたいと願ってやまない。長い海外生活に終止符を打つ日は近いと信じている。